



正宗白鳥全集

第五卷

福武書店

正宗白鳥全集第五卷

一九八三年十二月十五日 印刷

一九八三年十二月二十五日 發行

著 者 正 宗 白 鳥

發行者 福 武 哲 彦

發行人 株式會社 福武書店

東京都千代田區九段南二丁目二八

丁 101 電話 (03) 230-1231

振替口座 (東京) 六一〇五〇七

印刷・製本 大日本印刷株式會社

定價 五八〇〇圓

第六回配本 (全三十卷)

(落丁・亂丁本はお取り換え致します)

正宗白鳥全集 第五卷

裝	編	監
丁	集	修
山	中	井
高	島	伏
登	河	鱗
	太	二
	郎	
	紅	
	野	
	敏	
	郎	
	健	
	吉	
	夫	

第五卷
小說五
目次

弱 蟲

九

十年前

六

何處までも

五

同じ道

一〇

刻々の思ひ

一三

入江のほとり

一三

最初の女

一五

一 念

一四

春が來たのに

一七

夏木立

一八

道樂雙六

三〇

刺戟のまゝに

三二

二少女

三四

友達の良人

三五

書齋の人より

三六

絲瓜の棚

三八

催眠藥を飲むまで

三九

姉の夢

四〇

田舎者

四三

舊家の子

四九

電報

四七

牛部屋の臭ひ

四一

解題

中島河太郎

五三

小
說
五

弱 蟲

一

凄まじかつた雷雨もけろりと止んで、木の葉を洩れた夕日が縁側に微動した。碓氷川の水音は勢ひを増して、涼しい風は川上から流れて来て部屋の中へ吹き込んだ。

小池は窓際に凭れて、趣の異つた周囲を見入つた。雨や風に頭の中を洗はれたのか、今までの厭はしい思ひが稍薄らいで、すが／＼した氣持になつた。裏木戸を蔽うて柘榴花の咲いてゐる小やかな向ひの家が、昔物語にある由緒ある人の住居のやうに床しく見えた。その後ろの旅館の二階

に、老婆が白い腰巻一つで體操をやつてゐるのさへ、繪の中の人物のやうで、さして醜くは思はれなかつた。老婆はやがて浴衣を着て欄干に寄つて團扇を使ひながら此方へ目を留めた。すると、小池はそれを機會に座を立つて、湯殿へ下りて行つた。臭氣のある粘く濁つた湯に浸つて、よく胃腸を摩つて、上りがけに鹽辛い鑛泉の水を二三口飲んだ。急に腹が減つて物慾しさを覺えた。

彼れは女中を呼んで食事を急がせて、待つてゐる間に旅行案内を開けて、粗略な地圖や上り下りの汽車の時間表を見てはさまざまに迷つた。明日の朝立つて善光寺から越後路へ入らうかと思つたり、一そ思ひ切つて今夜の終列車で歸京しようかと思つたりした。稍もすると歸りたくなるのを強いて否定して、北國の名所古蹟をさも美しさに空想して、自分の心を引き立てた。そして、名物の豆腐や川魚などで甘い晚餐を食べてから、橋の袂まで散歩して、溪流の源へ遠く目を放つた。山また山の彼方に嘗て見たことのない珍しい土地がありさうに思はれた。

「おれは生れて以來深山へ入つたことがないんだが、此處まで来たほどだから、次手にあの山の峽を分けて行けるところまで行くといふんだ。」彼れは躊躇してゐる自分の心を勵ませた。せめて、今日午過ぎに公園の木の間から遙か

に見上げた妙義山へだけは是非登つて見なければならんと考へた。「自分は何時死ぬかも知れないし、何時またこんな旅へ出られるか分らないのではないか。只の一個所でも多く知らぬ世界を見て置かなければならない。」

で、小池はさう定めて、宿へ歸ると番頭を呼んで、妙義登山の道順を訊いたり近所の名山奇勝を訊いたりした。

「妙義はいゝ山です。岩が面白う御座います。大きな岩に穴が開いてゐて、其處が潜れるやうになつてゐます。一日掛ればゆつくり登つて來られますよ。」

「山は危険ぢやないかね。」

「なあに、案内者を連れて入つしやれば些とも危なかあ御座いませんよ。紅葉時には東京の藝者衆でさへ大勢で登るんですから。彼方には幾軒も宿屋が御座いますから、其處で草鞋を穿いて辨當を持つて入つしやるとよう御座いませう。」

番頭の言葉には相手を誘惑するやうな力がなかつた。小池は立ち入つて委しくは訊かないで、「ぢや、明日都合がよかつたら行くかも知れない。」と云つて、番頭を返して、部屋の中に寝そべつて手足を伸した、軒端に見える雨後の夕空はますます美しく、風はますます涼しくなつたが、ともすると、黙つて皮膚に喰ひ入る藪蚊に驚かされた、刺

されると痛くて思はず飛び上つた。で、じつと落着いて周圍を眺めたりしてはゐられなくて、團扇を持つて廊下をぶら／＼出した。蒼澄んだ空には星が燦めき出した。

「あゝ早く歸りたいな。」と、ふと壓へがたい慾望が起き上つて、藪蚊のやうに心を螫した。すると、景色をも涼味をも感ぜられなくなつて、一圖に東京の家が慕はしくなつた。……今時分、蚊遣香の煙がそよ風に棚引いてゐるだらう。今時分、行水を使つて派手な浴衣を着て、岐阜提燈の下で、薄化粧した女房が涼しい目を見張つて、蟲の音を聞いてゐるだらう。近所から風琴の音が聞えたり琴の音が聞えたりしてゐるだらう。……

小池は階下へ下りて帳場の時計を見たが、夜の十一時頃に東京へ着く汽車は最早出た後であつた。今宵一夜はどうしても藪蚊に螫されながら一人で過さねばならなかつた。

彼れは一組の繪端書の使ひ残りの凡てへ「かね子殿」と宛名を書いた。そして、自分の身體には東京住ひの方が適してゐると書いたり、でも、伊香保と此處の温泉はよく身體に利いて、大分加減がよくなつたと書いたり、旅費も成るべく浪費しないやうにしてゐると書いたりした。明日あたり歸京するといふことも微見かせて自分でポストへ入れに行つた。土産の饅頭煎餅をも買つて來た。

寢床の用意が出来る間に、今一度湯に入つて鑛泉を飲んだ。そして、眠くもないのに早く蚊帳の中へ入つて、溪川の水音に耳を留めてゐた。十日ばかり旅寝を重ねて来たけれど、彼れはまだ獨り寝には馴れなかつた。夜毎に蚊帳の廣さが歎ぜられた。眞夜中に目醒めた時には殊に堪へられぬ淋しさを覺えて、ある夜は打伏して涙を流したことさへあつた。隣りの室の夫婦連れの私語が耳についたり、散歩姿が目についたりすると、直ぐにも東京へ歸りたくなつた。「おれは何故一緒に來なかつたらう。何故一緒に湯治に出られるやうな境遇になれないのだらう。」と、誰れをともなく恨むやうな氣持になつた。三四年前の獨身時分に長旅に出た時よりも、今の方が却つて他の夫婦連れの旅を見て嫉ましくなるのだつた。

小池は二十六歳の秋に、友達の勧めで不意に結婚したのだつたが、それまでは自分のやうな者の女房になつて呉れる女があらうとは思はなかつた。身體は弱いし、親譲りの財産があるのでないし、友達の誰れ彼れのやうな處世の腕を自分が持つてゐるのではないし男振は十人並以下であるしと、我れとわが身を見くびつてしまつて、楽しい家庭の味ひなどは夢にさへ見ようとはしなかつた。無論賣女に關係したことは一度もなかつた。知人の家で會つ

た女に心惹かれることはあつても、どれも皆自分とは釣り合ひが取れぬほど立ち優つてゐるやうに思はれて、戀の成り立ちを望むのは大それた考へのやうに思はれた。だから、知り合ひの美しい女が知り合ひの男と結婚したからと云つて、嫉みも羨みもしなかつた。只何となく淋しい思ひが胸を掠めるに過ぎなかつた。辛うじて月々の食料が支拂へるだけの稼ぎをして、下宿屋の四疊半で、どうせ短いに極つてゐる一生が送れ、ばいぐらゐに諦めてぼんやりしてゐた。遠慮勝ちな大人しい男として、下宿屋の下女や友達に好かれてゐた。

「あなた、こんな方をどう思つて？ いい容貌でせう。」と、友達の妻君が寫眞を見せて、女の素性を話して、藪から棒に縁組を勧めた時には、彼れは驚かれてゐるのだとのみ思つて、容易に本氣で話に乗らうとはしなかつた。騙されるつもりで見合ひをして、先方が承知したからと云はれて、否應なしに押し付けられ全で狐に抓まれたやうだつた。

それから二年の間、豫期しない樂みや苦しみが彼れの心をも身體をもへと／＼に疲らせた。そして、今度の旅行は女房のはからひで健康回復のために無理やりに出されたのであつた。

朝早く目を醒まして麗らかな日影を見渡して、ふわりと香ふやうな涼風を吸ふと、彼れも流石に元氣づいて、旅の有難味を覺えた。で、兎に角俣を雇つて妙義まで出掛けた。杉の立木の神さびて聳えた神社に參拜して、鋭い形のくつきりと浮んだ名山を仰いだが、俣夫の勤めに關らず、小徑を分けて其處へ登つて行く氣にはなれなかつた。女房への話の種にもと心を勵まして、どうしても足が命令に従はなかつた。暫らく石段に亙んで、妙義の町の今昔の變遷などを俣夫に聽いてゐると、晴れた空から折々灰が降つて來るのに氣付いた。淺間の灰ださうだ。

「ぢや、噴火がひどくなつたらこの邊も恐しいね。」
「なめに、この邊は大丈夫です。」

俣夫は平氣で云つた。小池はまだ見たことのない噴火山の凄まじい光景を思ひやつたが、そんな危険な處へ近寄る決心はつかなくつて、灰の降る空を見返り／＼歸路についた。

旅の間にのびた髻を剃つたり、荷造りしたりしながら、自分の家の様子を想像するのは樂しかつたが、女房に對し

て持つてゐる長い間の疑惑や、彼女の日頃の仕打ちを考へると、折角引き立つた氣が沈んで顔付きへも萎れた。

午過ぎには昨日と同じやうに夕立雲が渦卷いた。小池は乗車前に何時何分上野着の列車で歸ると、女房に宛てて電報を打つて置いた。電光は妙義の山の方にきらめいて、雨は斜めに車窓を打つた。彼れは左右の青田や農家を繪のやうに眺めてゐたが、東京へ近づくにつれて、次第に女房の顔のみが目先にちらつき出した。どんな風に取扱つたら女の完全な愛情が得られるのだらう。刺を含まない顔と柔しい口調で絶えず撫でられてゐなければ、とても永く健やかな生命は保たれないのに、と世の中で唯一人の手頼りとして寢ても起きて心から離したことのない女房に、自分の心がよくくみ取られないのを情なく思つた。「おれは七年前に母に死に別れてからは、かね子の外に親しい女は一人もないのだが、一體女といふ者は心の奥でどんな事を考へてゐるのだらう。何を包み隠してゐるのだらう。喜ばせるつもりで云つたことが怒りを買ひ、家庭の興を増すためにすることを卒氣なくも斥けられたり、……おれは學才の乏しいことは憾みはしないが、只女房の機嫌の取れるだけの腕前は持つてゐたい。……」彼れはさう思ひながら、前に腰掛けてゐる二人の若い女の顔に目を留めた。「あの白

い柔かい皮膚の下に、どんな神経が網を張つてゐるのだらう。あの瞬きしてゐる目の奥に何が潜んでゐるのだらう。」と、不思議でならなかつた。見てゐる間に一人の女は顔を背け、一人の女は輕蔑したやうな眼付で彼れを竊み見した。

一しきり激しかつた雷雨は上野へ着いた時分に名残りなく止んで、夕日はあか／＼と照つた。小池はブラツトホームへ下りると、きよろ／＼あたりを見廻した。改札口を出ても暫らく立ち留つて目を注いだ。しかし、かね子らしい女はついに見つからなかつた。電報で掛けた謎は女の胸に何の感應もなかつたのである。女房が一度實家から戻つて來る時には夫の方からこの停車場へ出迎へに來たのだったが、群集の中で互ひに相手を見つけた時には云ひやうのない懷しさを覺えた。「女の方ではさうも感じないのか知らん。」

水氣が夕日で蒸されて湯のやうだつた。小池は喘ぎ／＼泥濘の中を低い下駄で歩いて廣小路へ出て、汗臭い電車に乗つた。神樂坂で電車を下りると、鞆を脊に掛けて脇目も觸らず家へ歸つた。

彼れの家は細い道の突き当たりの門の中にあつて、屋根が低くつて古びてゐて小さかつた。近所に同じやうな家が

四五軒もあつた。小池が門を入つた時には、妻君連が三四人門口で涼みがてら立ち話をしてゐたが、「おやお歸んなさいまし。」「何方へ行つて入つしやいました?」と、左右から親しげに聲を掛けた。何時もこんな連中の話仲間に交つてゐるかね子は、今夜はどうしたのか其處等にもなかつた。

「え、上州の方へ。」と、小池は口の内て云つて、帽子を被つたまゝ挨拶して行き過ぎた。留守番に頼んだ十五六の小娘が格子戸の前を掃いてゐたが、目の下に大きな痣のある顔を上げて小池を顧みても挨拶さへしなかつた。

小池は力強く戸を開けて玄關へ上つてドシンと鞆を置いた。ゐないのか知らんと氣遣つて奥を見ると、「あら……大層早かつたのね。」と、快活な聲を掛けて、かね子が振り向いて笑顔を見せた。白い腕をぐつと持ち上げて漆のやうな濃い髪を握つたまゝ振り返つた。「お風呂に行つて入つしやい。行水でよければまだお湯が少し残つてゐるでせうけど。」

「湯には飽きるほど入つて來たから、一寸汗を流しさへすればいい。」

小池は手早く衣服を脱いで、猿股一つで庭先へ盥を出して、釜の湯をうつした。そして、「あゝいゝ氣持だ。」と

か、「アー。」とか「ウー。」とか獨り言を云ひくゝ行水を使つた。

「でも面白かつたでせう。」と、かね子は鏡を覗き込みながら呟いた。

相槌を打たれたので小池は調子づいて旅行話をし出した。瓦斯の光に照らされた白い横顔や、次第に髪が束ね上げられるのを薄暗い庭から見上げながら、盥の中でばちやばちややつてゐた。

粧飾が終ると同時に、小池は行水を終つて、縁側へ足跡をつけて茶の間へ入つた。

「温泉がそんなに效能があるのなら、せめてもう一週間ぐらゐ逗留してらつしやればいいのに。」かね子は煎餅の罐を開けて、さも甘しさに快く二三枚食べた。

「あなたのゐない間は一度も外へ出なかつたのよ。いろいろ買物が溜つてゐるから、今夜きよを連れて神樂坂まで行つて來ませう。あの女も今夜家へ歸すんだから、何か買つてやらなきやならないしね。」

「さうだね。しかし、さう急いであの女を歸さなくつたつていゝぢやないか。留守番のあつた方がいゝよ。」

「だつて私あんな女は嫌ひさ。置くほどならもつと氣の利いた女を置きますさ。」かね子は衣服を着換へて出仕度

取り掛つたが、ふと思ひ出したやうに、「二昨日だか山村さんが入つてよ。」

「へえ、山村が？」小池は不愉快な顔をして、「何か用事があつて來たのかね。」

「さうらしくもないの。相變らず馬鹿なことばかり云つて行きましたよ。でも、邪氣のない人ね。……あなたも時々あの方の家へ遊びに入つしやいな。始終山村さんなぞと交際してれば、あなたも快活になつて身體のためにもいゝんですよ。」

あんな輕薄なお饒舌がどうして女の氣に入るのだらうと思ひながら、小池は押し黙つてゐた。

三

かね子が小娘を連れて出掛けた後、小池は自分の書齋に當てゐる座敷へ入つた。兎に角女の機嫌がよかつたのが悦しくて、古ぼけた狭い部屋も住心地よく思はれた。岐阜提燈に火を點けて端近く出て、浴衣の胸を擴げて夕風を入れた。心の鎮まるにつれて、幾日も寢足りなかつた旅の疲れが出て、知らず知らず轉寢の夢に入つた。

と、やがて、隣りの主婦が庭木戸を開けて來て、二三度